

お話をよく聞く子どもを育てる

法話を聞いて、想像力を養い、豊かな感性を育む

子どもは絵本を読んでもらうのが大好きです。大好きなお母さんやお父さんの膝の上でスキンシップを取りながら、優しく温かいお話の世界の言葉が聞こえてくるのです。園生活でも、大好きな先生が読んでくれる絵本の世界は、子どものころを羽ばたかせます。絵本の中では子どものこころが大きく動いているのです。しつかりした絵本には素晴らしい絵と美しい言葉にあふれています。絵本の絵は大人には固定されているように見えますが、子どものころの中ではその絵が自由自在に動き回っています。音としての言葉が響きとりズムを持つて子どものころの中ではそのしかけていきます。そんな時の子どもはじっとそのお話を聞き入っています。身体はじっとしていますが、ここは想像の世界に開放され大きく動いているのです。その時感性が磨かれていくのです。

感性とは、自分のまわりに起きている出来事や日常生活の小さな事柄に、柔らかな感覚を働かせ、反応したり驚いたり感動してそこにあるものや現象に気付く敏感な心です。このアントナと言つてもいいかもしれません。その子なりの感覚によつて世界をとらえる力、感じるこころです。「楽しい」「気持ちいい」「きれいだ」「不思議だな」「なんでだろう」「変だな」「嫌だな」というこころの動き全てを含んでいます。そんなこころのアンテナをいつも働かせて生活していくと、どんな環境に置かれても、新たな発見をして、ゆたかな人生を歩むことができます。

絵本の世界だけでなく、子どもは生活や遊びの中で、五感を通していつも楽しさなど、こころを動かされる出来事を感じ取っています。そのとき、子どもは主体的に感じ、考え、行動し、表現しています。感性が磨かれているのです。

本堂に立っている阿弥陀さまの姿を見た時、園庭にある親鸞さまの立像にお花やおだんごを供えているとき、大人には動かない立像にしかみえませんが、子どもにとつては阿弥陀さまはいつも自分のそばにいてくださる、親鸞さまはいつも自分のことを見ていてくださると感性でとらえています。感じています。動くはずがない、という大人の価値観は必要ありません。阿弥陀さまの光に照らされて育つている姿といつてもいいかもしれません。そんな子どもの姿を大切にしながら、私たち大人は、「この子は今こんなことを感じ楽しんでいるんだな」と受けとめていくことです。どのように感じようと、正解はありません。一人ひとり感じることは違うということを理解していくことです。

正解がない問題が山積みのこれから時代は、何が課題かを判断したり、独自に解決策を生み出していく「考える力」が注目されていますが、自分なりの「感性」を育むことは、主体的に考える土台として、今後ますます必要になってくるでしょう。まことの保育を実践する時、自ら考える基に阿弥陀さまの姿や親鸞さまの姿があるのです。

まことの保育の願い